

## 教育美術・佐武賞 選考を終えて



**橋本 光明** (はしもと みつあき)  
 公益財団法人教育美術振興会  
 教育美術・佐武賞担当理事  
 信州大学 名誉教授

今回の応募者は、北は青森から南は鹿児島まで全国各地の小・中・高校・特支・大学にお勤めの17名であり過去最多となりました。応募作品は昨年中に届いたものから締切間際まであり、実践研究に取り組む期間や方法などの違いや研究分野の幅広さなどをあらためて感じます。

教育美術・佐武賞の選考は、選考委員が応募作品を査読し、評点等に基づいて3年ぶりの対面による予選会を経て本選会でさらに時間を掛けて審査します。ゲスト審査員の浜田寿美男先生が審査に加わることによってそれぞれの実践研究について、子どものためになっているかを研究目的や内容、成果等から深く話し合うことができました。

第57回は受賞した論文がなく、論文の掲載がありませんので、17の実践研究の“成果やまとめ”などを中心に独自の判断で記述の一部を抜粋し、紹介します。僅か数行の文ですが17名(以下、①～⑰)の応募者の実践研究に取り組んだ結果の喜びや他へ伝えたい気持ち、可能性や課題などの一端に触れ、新たな実践研究の参考になればありがたいです。

### 第57回応募論文における「成果やまとめ」からの抜粋

- ① 主体的に学びに向かう態度を評価するカリキュラムデザインの……題材の意義を考えるでは、……生徒にとってどんな意味があるのかを分かりやすく伝える工夫が要る。
- ② 特に関係や社会に主軸をおいた同時代の美術を扱う題材の場合、開発した評価指標は有効である。
- ③ (ICT機器を活用し) 表現と鑑賞の相互の関連を図った指導計画の作成により、生徒が学校内のみの学習で身に付けた資質・能力を、美術館など実際の場で生かし働かせ、……題材で身に付けさせたい資質、能力の育成の充実が見られた。
- ④ 今回の実践では、スライド構想から一定の成果が得られた……さらに、表現する手立てとして構想段階の支援は必須であり……そのために、今後はICTの活用場面を精選し、デジタルとアナログのバランスをとりながら授業デザインを見直す。
- ⑤ 絵の具や粘土、様々な材料を生かしたアナログな活動を大切にしつつ、デジタルも上手く活用して組み合わせることで、児童の表現の幅を広げることが大切である。
- ⑥ 「対話による鑑賞」を行う中で、……造形的な見方や感じ方の広がりや深まりが生まれ、「鑑賞活動充実のためにICTも工夫した活用」からは、美術作品鑑賞への関心を高めたり、振り返り活動等を充実させたりすることができた。
- ⑦ 系統的・体系的な平和教育において積み重ねた学びを題材の発想の基とすることで、全ての生徒が創作活動に積極的に取組み、……誰一人取り残さない取組みとなった。
- ⑧ 色や形の面白さを追求したり、自分なりの意味を込めて色や形を考えたりすることを意識した作品づくりをしていくと、そのような観点でお互いの作品を見ることができるようになる。
- ⑨ 個人差があるものの、コラージュ制作には知的障害児の気分をポジティブな方向に導く傾向が窺われた。
- ⑩ 子どものありのままの欲求や表現、迷いなどを認めることや、多様な表現方法を許容すること、……年間二回にわたって「まち」を表現させるなどの場の設定は、生き生きとした表現を生み出すことにつながった。
- ⑪ (五感の総合芸術と呼ばれる)和菓子の授業により、日本の美意識を見つめ直し、昔の日本人が繊細な季節感や色彩感覚を持っていたことを知る。
- ⑫ 「アジアの美術文化の鑑賞」の実践が功を奏し、生徒は異文化に対し偏見無く受け入れる体制が整っていたため、本題材(「想像の民族衣装」)に対してもスムーズに取り組むことができた。
- ⑬ 児童の多くが納得するまで「つくり、つくりかえ、つくる」行為を展開させ、草分け的に材料操作の方法を探っていた。
- ⑭ 一教員の研究の発表と違い、ユニットの活用により複数の教員の知見を積み上げ授業の質を高めていく研究会にすることで、参加者が授業デザインの力を付け、生徒に最良の授業を提供できると考える。
- ⑮ 児童の思いに共感し、活動の状況を形成的に評価しながら、思いと表現の関係性を問う発問をしたり、拡散的思考をさせたり、発明先行構造を見付けさせたりする指導を行うことで、繰り返し創造性を発揮させることができた。
- ⑯ (花びら)一枚ずつ違う色を塗れば、輪郭線は必要ない。……この話によって、生徒たちの意識は変化を見せ、……大部分の作品から黒い輪郭線は消えた。
- ⑰ 技法を理解・習得することにより、自己の主題に応じて表現方法を創意工夫する余地が広がり、より充足感の得られる作品として実体化した。

## 教育美術・佐武賞 選評

私は美術教育の世界にはまったくの門外漢です。そうでありながらここにお声をかけていただいたのは、私がこれまで自分なりに子どもの育ち、人の成り立ちを考えてきた人間だからということでしょうか。ともあれ応募された論考に目を通しながら私が思ったのは、どの論考もみな人の生きる「現場」に根を持つものだったということです。

最終選考に上がった村重論文は、生活科や国語科の授業と連動させて行った小学2年生の取り組みでした。『子どもが絵を「生きる」とき』とのタイトルが付されていることから見てとれるとおり、自分たちの生きる小さな町に出かけ、そこでの人との交わりや経験を、空想を交えて絵に表現し、子どもどうしがたがいの絵を鑑賞し合うなかで、一人一人がそれぞれに多様で造形的な面白さのある表現をするようになったという話。この世に生まれてまだ7、8年の子どもたちが、表現の活動を通して自分たちの生活世界を広げ、それをたがいに交換しあう。その「現場」に立ち会っていることの喜びが伝わってくる論考でした。ただ残念だったのは、冒頭に掲げた「研究の仮説」あるいはその元となった理論が現場の実践にしっかり収まっていないこと、あえて言えば、そこからは浮いて見えたことです。

私はこれまでいろんな現場の人たちとのつき合いのなかで、現場に合った理論を外から見つけるのではなく、理論

というのはまさに現場の営みのなかから立ち上がってくるものではないかと考えてきました。たしかに現場に理論や方法は必要です。しかし、その理論や方法はまさに当の現場から生まれるものではないか。そう思うのです。

野村・伊藤論文は、福井県で小学校・中学校・高校をつなぐ造形教育研究会を組織し、造形・美術教育の現場の取り組みから授業支援のための「造形ユニット」を開発してきたという報告でした。その背後には現場での長年の実践を振り返り、そこから一般化を目指して方法を整理し理論化しようとする大変な努力があったことがうかがわれます。ただ一方で、方法・理論が全面に出たことで、逆にこれが用いられている現場の実践がまったく見えなくなったことが残念です。現場の実践と理論・方法が連動した論考を期待したいと思います。

どのような現場も既成の理論には簡単に収まらないもの。しかし、現場で生きる理論はまさに当の現場から生まれるものではないかということを、あらためて感じさせられました。



### ゲスト選考委員

**浜田 寿美男** (はまだ すみお)

奈良女子大学 名誉教授

### 【プロフィール】

香川県小豆島に生まれる。京都大学文学部卒業、同大学院研究科博士課程修了(心理学)。花園大学を経て奈良女子大学文学部教授。発達心理学において人の「成り立ち」を考えるとともに、子どもがかわる甲山裁判への参加を機に法心理学の世界に入る。

### 【主な著書】

『私』とは何か(講談社、1999年)、『障害と子どもたちの生きるかたち』(岩波現代文庫、2009年)、『自白の心理学』(岩波新書、2001年)、『袴田事件の謎』(岩波書店、2020年)、『心理学をめぐる私の時代史』(ミネルヴァ書房、2021年) など

## 教育美術・佐武賞 選評



**新井 哲夫** (あらい・てつお)  
群馬大学 名誉教授

はじめに、教育現場の厳しい状況の中で実践研究をまとめ、応募された方々に敬意を表します。今回の応募論文を通読して強く感じたことは、研究の視点が明確でないために、実践を通して何を明らかにしようとしたのか曖昧になり、実践した事柄の説明にとどまっている論文が少なくないということです。研究の視点が曖昧であると、自信のある実践であればあるほど、あれもこれも盛り込みたい気持ちが強くなり、結果的に広く浅い網羅的な説明に傾きがちです。どんなに成功した実践でも、それを記述しただけでは研究になりません。例えば、どのような理由や根拠から成功したと判断できるのか、成功をもたらした原因や条件はどこにあるのかといった事柄について、説得力のある新たな事実や原則を導き出せれば優れた実践研究と言えます。逆に、実践が不成功に終わっても、それを元に一般性の高い事実や原則を明らかにできれば、実践研究としては優れているということになります。

さて、最終選考に残った4編の内、村重仁美氏の論文は、コロナ禍で消極的になりがちな児童に対して、教科横断的な題材＝単元を設けることによって積極的な活動を引き出した実践であり、児童の活動の様子がビビッドに伝わってくるものでした。ただ、システムミックデザインアプローチの解釈や援用の仕方が恣意的にみえる点や、実践を通して何を明らかにしようとしたのが曖昧な点など、まとめ方にもう一工夫欲しいと感じました。

前之園礼央氏の論文は、ICT 機器を中学校美術科の授業に取り入れることにより、他機関との連携や分散授業・オンライン授業への対応を図った意欲的な実践であり、多大な努力の跡がうかがえました。ただ、研究の視点が曖昧

なため説明が網羅的になり、生徒の学習に深く踏み込んだ考察に至らなかった点や、成果をアンケートのみで裏づけている点などに課題があると感じました。

野村由香里・伊藤裕貴氏の論文は、小・中・高連携による「造形ユニット」の開発に関する報告であり、10年に及ぶ異校種による共同研究はたいへん貴重な取り組みであると思います。ただ、実践研究としてみると、内容がユニット開発の時間的経過を中心にまとめられているため研究の視点が希薄なこと、ユニット開発に関わる教育現場の要求や期待(校種によって異なるはず)、教育現場での具体的な取り組みにふれられていないことなど、まとめ方に課題があると感じました。

友竹晋太郎氏の論文は、「広島市立学校平和教育プログラム」では図工・美術科に関わる題材が小学校低学年以外に設けられていない点をふまえ、中学校3学年向けの題材を開発し実施した実践報告であり、美術科の学習を通して平和教育に貢献しようとする意欲は高く評価できます。ただ、図工・美術科の題材が小学校低学年のみに設定された意味についての問い直しや、合科的単元として計画された平和教育プログラムを美術科単独で実施することの意義などについての基本的な説明が欠けていること、「平和」といった大きなテーマを取り扱う際に不可欠な、生徒の実感に結び付けるための指導上の工夫や配慮にふれられていないことなどに物足りなさを感じました。

上記以外では、アジアの美術文化の理解に焦点を当てた高校の実践、和菓子制作を通じて地域との交流やキャリア教育に発展させた中学校での共同研究、構想段階の指導にタブレット端末を取り入れた中学校の実践、地域の美術館を活用した小学校の土曜美術鑑賞会など、実践として優れていると感じました。研究の視点を明確にした上で、児童・生徒の活動が前面に出るようなまとめ方をすると説得力のある実践研究論文になるのではないかと思います。また、アクリルガッシュを用いた自画像制作に関する研究は、実践研究論文として形式面でよく整理された論文ですが、この活動を果たして「造形的な表現活動」と言えるのかどうか疑問が残りました。

## 教育美術・佐武賞 選評



岡田 京子 (おかだ・きょうこ)  
東京家政大学 教授

資質・能力の育成を目指した学習指導要領の趣旨の実現に向けて、全国の学校などにおいて様々な実践研究が行われています。新型コロナウイルス感染が収束しない状況において、継続して研究を続ける先生方には頭が下がるばかりです。このような状況の中、ご自身の研究をまとめ第57回教育美術・佐武賞に応募されたその行動力に心から敬意を表します。

今回は残念ながら該当者なしの結果でしたが、それぞれの論文からは、先生方の研究で得た知見とともに、子供と造形を通して関わることの重要性が伝わってきました。

前之園礼央先生は、ICT機器を活用して美術科の学習と生活や社会をつなげ、生徒が生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育む取組を実践され、それをまとめていました。様々な事例はこれからの美術の授業でのICTの活用に寄与するであろうと感じましたが、やや活動紹介に寄っていた点が残念でした。

友竹晋太郎先生は、「ヒロシマの空」を描くことを通して平和への心を育てる取り組みを実践され、それをまとめていました。被爆者の方との作品を通じた交流をするなど、生徒が主体的に取り組むことができる授業設定となっていました。技能に寄っている分析となっている点に改善の余地があると感じました。

村重仁美先生は、カリキュラムマネジメントとして、教科等の関連の中での指導の在り方に取り組みされたことをまとめていました。子供の興味が継続する丁寧な指導が子供の姿や作品から伝わってくる印象的な論文でしたが、説明的な表現の作品だけではなく、教室で見られたであろう様々な子供の作品も含めて分析することで、さらに説得力

のある論文になっていたのではないのでしょうか。

野村由香里先生と伊藤裕貴先生は、地域での実践である、造形・美術教育の支援ツールの開発についてまとめていました。学校種を超えて、地域として指導の充実に向けた継続的な取り組みをまとめたことは大変貴重なことで、全国の先生、研究会、教育委員会の先生方の参考になるものだと感じました。支援ツールは活用されて価値がわかるものなので、各学校種の活用事例の紹介部分を充実し、その分析を十分に行うことが重要なのではないかと感じました。

そのほか、創造性に関する評価指標の作成に取り組んだ論文、アジアの美術文化に関する論文など視点が特徴的なものもありました。また、ICTの活用、子供の思い、造形遊び、地域での美術鑑賞会、日本の伝統文化などをテーマにした実践記録を根拠にまとめた論文もありましたが、活動紹介に留まってしまっていることが大変惜しかったです。これは、今回の応募論文の大部分に言えることではないかと思います。先生方の実践は素晴らしいのですから、何を分析・考察し、論文として何を結論とし伝えるのかを明確にすることにより改善されると考えます。

今回の投稿論文は、再度の挑戦を期待するものばかりでした。はじめに、学習指導要領の趣旨の実現について触れましたが、資質・能力を育成することについての理解も、論文を充実させる視点となります。子供の姿と結びつけて理解していただけるようお願いいたします。

## 教育美術・佐武賞 選評



**竹井 史** (たけい・ひとし)  
同志社女子大学 教授

今回、残念ながら佐武賞は選出されませんでした。応募論文についてコメントし、今後の参考にさせていただきたいと思います。

野村・伊藤両氏の『造形・美術教育の支援ツール「造形ユニット」の開発』については、福井県造形教育研究会をあげての素晴らしい成果が「授業デザインシート」としてまとめられました。応募論文では、取り組みの紹介が概説的であるため具体的な内容の理解が難しいことが残念でした。「造形ユニット」の本質的な意義や考え、また、再現性を伴う客観的な成果等について読者にわかりやすく整理、再提示できれば、さらに良い実践研究報告になると思います。

友竹氏の『「平和を希求する心」を培う～「ヒロシマの空」の実践を通して～』は、平和教育の学びを空の「色」という造形的な要素に焦点化し、具象的な表現に苦手意識を持っている生徒にも取り組みやすい表現活動とし、モダンテクニックを生かそうとした点は意義あるものです。しかし、短時間完了の実践をもとに、平和教育を表現し、平和に対する意識が深まり、豊かで深い学びの実現につながったと結論づけるのはなお慎重であるべきだと思います。そこには、筆者も言うように、色と体験を結びつける系統的、継続的な取り組みが必要でしょう。

前之園氏による『ICT 機器を活用して美術科の学習と生活や社会をつなげ、生徒が生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育む取組』は、Web 会議システムを駆使し、コロナ禍における新たな学習のあり方、題材開発として現代的な視点を提案している点が評価できます。反面、美術作品の鑑賞行為において、直接体験

ではなく、モニター等を通じた間接的体験によってそぎ落とされる作品の造形面における「質」の検討に関しては、明確に述べられておらず気になります。

村重氏の『子供の絵が「生きる」とき～社会・生活・教科等の文脈の中で生き生きと表現するための指導のあり方についての研究～』は、コロナ禍で閉塞状況に陥らざるを得ない児童たちに対し、生活科、国語科、図画工作科の教科を関連させた地域とのかかわりを深める中で、モチーフや作品に対する思い、主題など表現としての深まりや広がりや豊かにしようとするものです。児童の作品や表現に対する思いも豊かなものになっていることが推察されます。ただ、実践の理論構築に援用されたシステムミックデザインアプローチ自体が本実践の理論構築となじみにくい内容であるため、本実践の意義をわかりにくくしている点が残念です。

その他には、アジアの美術文化の鑑賞を通じ、アジアの美術文化において新たな美を発見し、美術の幅を広げようとする優れた実践もありましたが、想像の民族衣装の制作課題を設定することで前半の地道な学習との関連性を希薄にしてしまったことが論文としての一貫性を損ねてしまいました。また、子どもの図工の力を伸ばすために図工が楽しいと思える題材であり、活動に自信が持てる題材を基にした授業づくりも、参考になる良い実践論文もありましたが、それらの実践を生み出す教師の支援や環境づくりがより具体的に示されるとよりよいものになったと思われます。造形遊びに関する実践論文にも優れたものがあり、造形遊びに取り組む上での段階的な指導のプロセスは参考になると思われましたが、やや教師主導の展開が造形遊びの本質から遠ざけたことが残念でした。現代的なテーマとして Society5.0 に着目した図工の先進的な取り組みも優れたものがありましたが、やや一般的な実践であり、オリジナル性が伴えばさらに評価されるものとなりました。それ以外には、創造性の発揮のための教師の手立てや指導についての成果が示された真摯な実践論文も印象に残りました。授業に際しては具体的な作品が取り上げられることで検証されるとさらにより研究論文になったと思われます。

## 教育美術・佐武賞 選評



新関 伸也 (にいげき・しんや)  
滋賀大学 教授

第57回を迎える「教育美術・佐武賞」は、我が国の美術教育の優れた実践研究をひろく紹介する役目を負いながら回を重ねてきました。図画工作科や美術科における実践研究は、他者にも有益でかつ影響を与えるものでなくてはなりません。では影響を与えてくれる優れた美術教育の実践研究とは、どんな要素があるのでしょうか。それは「！(感動)」つまり、新たな発見のある研究です。先行の研究を踏まえながらも、そこに「独自性」や「新規性」が垣間見られたときに、読む者に感動が生まれてきます。

その意味からすると、限られた字数における実践研究の書き方やまとめ方が大変重要となってきます。実践をただまとめた報告だけでは、たとえ実践や研究の内容がよくても、感動には至らないことが多くあります。ですから、動機や先行研究を押さえ、実践の目的や仮説、方法や指導の根拠、成果が明確で、かつ活動の内容が見えてくる書き方が必要となってきます。それらを踏まえた論文であれば、読む者は「知らなかった」「ためになった」「まねしたい」という気持ちが起きてきます。今回の応募論文の審査にあたり、そのことを強く思いました。

さて、今回は、例年よりもかなり多い17編の応募がありました。しかし、教育美術賞・佐武賞及び佳作賞に該当する論文がなかったことが、たいへん残念です。そのような中でも、以下4編が最終審議に残りました。

まず、前之園礼央さんの論文は、ICT機器の利点を生かすとともに、コロナ時代の美術科題材の可能性を示しています。離島のある鹿児島県の特性を生かしつつ、遠隔地の美術館や伝統工芸家、他校との交流の場を設定し、表現及び鑑賞の実践を意欲的に行った点を評価しました。ただ、

各々の実践における題材設定の理由が不足しているのが残念でした。

友竹晋太郎さんの論文は、広島における平和教育プログラムの4観点を中学校の美術教育の場で展開し、題材の観点を明確にして実践しています。特に、被爆者と生徒の作品交流や作品分析をしっかりと行い、実践の妥当性を省察しています。図画工作との連続性や発展の記述が弱いところがあったのが残念です。

村重仁美さんの論文は、生活科や国語科と連携しつつ、図画工作科の表現活動を軸にした実践の在り方を提示しています。それらの実践の理論的ベースとして、「システミックデザインアプローチ」の4観点から実践を組み立て、子どもの作品とともに省察しています。ただ、実践の拠り所として「システミックデザインアプローチ」をなぜ導入したかが、説明不足でした。

野村由加里・伊藤裕貴さんの論文は、「造形ユニット」を軸に福井県をあげて小・中・高と一貫した造形教育カリキュラムを構築し、実践を重ねつつ普及・改善してきた点や各校種の教員が連携して授業改善に取り組んできた点を大いに評価したいと思います。一方で、「造形ユニット」が固定化し、授業の豊かさや実践の個別性を失うことがないように、留意してほしいと思いました。

他にも、図画工作科を核にした合科的な実践によるSociety 5.0を意識した展覧会の論文、造形遊びの段階的な指導をまとめた論文、創造性を育む図画工作科の指導と評価の工夫についての論文等が、真摯な研究として印象に残りました。

## 教育美術・佐武賞 選評



**山田 晋治** (やまだ・しんじ)  
淑徳大学 教授

終息に向かったかと思うと新たな変異株の感染拡大により翻弄され続けたコロナ禍における学校教育の中で、果敢に実践研究に取り組まれた各学校の先生方には敬意を表します。今回も多数の応募論文を拝読し、元気と勇気をいただきました。改めて美術教育に携わる先生方の真摯なお取り組みに感謝申し上げます。

さて、今回の応募論文は総じて甲乙付け難く、それぞれに特色ある創意工夫が随所にみられました。その中にあって、村重仁美氏の取組は、他教科との関連を活かして生き生きと表現できるようにしたいという授業者の思いや願いがよくわかる実践研究として高く評価できるものでした。論文中に取り上げられている児童作品はどれも生き生きと表現されているように感じました。

野村由香里氏と伊藤裕貴氏が長年取り組まれてきた「造形ユニットの開発」は、小中高をつなぐ効果的な造形教育の在り方を提案するものであり、各校種で頑張っている先生方にとって大いに参考になるのではないかと思います。今後、多くの先生方を巻き込み常に改善していく循環を生み出せばより実効ある手立ての確立が期待できそうです。

前之園礼央氏の ICT 機器を活用して美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力を育もうとした取組は、コロナ禍という逆境にあっても子供たちの学びを止めまいとする授業者の思いが伝わってくる実践研究でした。ICT 機器の活用がどれほど効果的であったのか、具体的な作品を例にして示してもらえるとさらに説得力が増したのではないかと思います。

友竹晋太郎氏による平和教育プログラムの一環としての題材開発をまとめた実践研究は、表現や鑑賞の活動を通して価値ある学びに迫る美術教育の可能性を感じさせてくれました。中学校第3学年に位置付けるのであれば、小学校図画工作から中学校美術のこれまでの既習内容を振り返らせ、生徒一人一人に自分のもっとも得意な表現方法で取り組ませる題材にもできそうです。

他にも学校現場を元気づけたり勇気づけたりしてくれそうな実践をまとめた応募論文が数多くありました。例えば、プロジェクトマップの効果を活かした校内展覧会の提案などの取組も Society5.0 時代を見据えた挑戦的な実践研究として高く評価したいと思いました。

また、地域に根付いている和菓子店と連携した取組や地元の美術館との連携・協働の実践など、それぞれの地域性を活かすという観点から多くのヒントがもらえるような実践研究も高く評価できるものでした。

その他、造形遊びにおける導入時の課題の共有・活動時の形と色の追求・振り返り時の活動過程の物語化という3つの手立てに基づく授業の実践研究や、創造性を見取る視点とその評価指標の開発を目的に課題解決までの筋道をわかりやすくまとめた研究なども高く評価できると思います。

一方、今回の応募論文がどれも甲乙付け難いレベルであったということは、反面突出したものがなかったともいえます。あと一步の詰めの甘さでしょうか、核となる主張を論じきれていない気がしました。取り組まれた内容はそれぞれに素晴らしいものばかりでしたので、今後はこちらの主張を明確に焦点化し、自信をもって論じてくれることを期待したいと思います。

全国の先生方お一人お一人の実践が未来を生きる子どもたちに元気と勇気を与えます。先生方には自信をもってお取り組みくださることを願っております。

## 教育美術・佐武賞 選考風景

今回は、新型コロナウイルスの感染予防対策に取り組みながら、3年ぶりに対面での予選会・本選会を行い、白熱した議論が繰り広げられました。



1. 2022年4月23日(土)、5名の選考委員（新井哲夫先生、岡田京子先生、竹井史先生、新聞伸也先生、山田晋治先生）による対面での予選会を行った。

2. 2022年5月20日(金)に開催した本選会の様子。

3. 本選会終了後、ゲスト選考委員を囲んで記念撮影  
前列左より：西村貞一理事長、浜田寿美男先生、橋本光明 教育美術・佐武賞 担当理事  
後列左より：岡田京子先生、新井哲夫先生、新聞伸也先生

\* 記念撮影時のみマスクを外して撮影。



## 公益財団法人教育美術振興会 理事長よりごあいさつ

教育美術・佐武賞は今回で57回目を迎えました。

本年は昨年に引き続きコロナ禍でありながら、17本もの実践報告が集まりました。これは近年では最大の応募点数となります。多忙な中、実践をまとめ、ご応募いただいた先生方、真摯に審査にあられた選考委員の先生方に改めてお礼を申し上げます。

残念ながら今回は佐武賞・佳作賞ともに該当者なしとなりましたが、今後も本賞では、学校現場の先生方の実践に光をあて、優れた授業を広めることに貢献していきたいと考えております。次回もまた、熱意あふれる論文のご応募をお待ちしております。



西村 貞一

公益財団法人教育美術振興会 理事長



教育美術・佐武賞担当理事 橋本光明先生からのメッセージ

# 望ましい実践研究は トライ&エラーの積み重ねから

「第57回教育美術・佐武賞 選考を終えて」(12ページ)に全応募者の実践研究の結果や成果等の一部を掲載しました。これら実践研究の最終的なまとめは、主に授業実践上の何らかの課題を改善した結果ですから意味や価値のあることです。

ところで実践研究はトライ&エラーの積み重ねなのでプラグマティズムについて言及します。プラグマは、行動を意味するギリシャ語動詞の語源“プラグ”に「結果・成果」を示す接尾辞“マ”が付いた名詞で「行為」とその「結果・帰結」です。「やってみてためす」という実験的な態度といえます。

教育においては、アメリカ・プラグマティズムの代表的思想家ジョン・デューイをご存じでしょう。偶然ですが今年は没後70年に当たります。半世紀前に購入したデューイ著『学校と社会』(宮原誠一訳、岩波文庫)の“子どもが太陽”、子どもに重力の中心を置くという主張に感動を抱き、自らの実践研究に自信と弾みがついたことを思い出します。

また、『民主主義と教育』(松野安男訳、岩波文庫)では、人間的成長のために必要なものが教育であり、それには成長の過程にふさわしい工夫が求められるとしています。

結果に至るまでのプロセスにおけるさまざまな試みや工夫と、テーマや目標の設定などについてさまざまな観点から省察することが実践研究の質の向上につながります。

1回の結果や成果に留まることなく、「結果・成果」重視の本来の考え方であるトライ&エラーを積み重ねることが日々の教育活動の改善や教育観の確立を促すことにつながります。

「実践研究」の蓄積の必要性については、次の通りです。

## ◆実践研究の蓄積の必要性について

1. 「実践研究」では、教師や学習者の行為の相互関係や活動の意味などを見出すことから授業への理解を深めます。
2. 「実践研究」は、教師間や教師と学習者間の交流によって醸成されるという考え方を大事にしており学習指導のあり方や教材の解釈などから教師の変容を捉えます。
3. 学習者は主体的に発想したり考えたりして活動する態度を身に付けることが重視されることから、学習者の活動の様子(表情、言動など)や質問紙調査等による反応の変容等を文字や映像などで記録に残して「実践研究」に役立てます。
4. 研究の成果は、再び授業に取り入れられ新しい「実践」が行われます。この「実践」と「研究」のサイクルが生まれることによってつながりができ、「実践研究」に意味が築かれ、妥当性が見いだされます。
5. 「実践研究」により客観性をもたせるには、授業者ひとりのための「実践」にとどめず、第三者の眼が必要になります。「実践研究」は、教師同士の話し合いを取り入れることで振り返りが一層意識化されます。

ぜひ現在展開している授業を「実践」—「研究」の観点から、新たな「実践研究」のステージへと進められることを願っています。